

造られ、生かされて

聖書 ヨブ記 38 章 1～18 節／ルカによる福音書 12 章 13～31 節

1 はじめに

先のことを考えると、気がかりなことがいくつも浮かびます。これからの暮らし、家族の健康、自分にできることが少なくなっていく心細さ。できるだけ備えておきたいと思うのは、自然なことです。それでも、備えを重ねるうちに、かえって心配が増えてしまうこともあります。

今日の二つの箇所には、異なる境遇の人が登場します。ヨブは、多くのものを失い、苦しみの理由を問い続けています。ルカ福音書の金持ちは、豊作を喜び、これからの暮らしは安泰だと考えています。

私たちが直面することには、自分でしっかり向き合っ取り組むべきことと、自分の力を超えているようなことがあります。そのような現実の中で、神に造られ、生かされていることは、どのような意味を持つのでしょうか。ヨブ記とルカ福音書、それぞれの文脈を踏まえながら、私たちの命を支えているものは何かを考えたいと思います。

2 ヨブ記はどのような書物か

ヨブ記は、箴言やコヘレトの言葉とともに「知恵文学」と呼ばれる書物の一つです。人生の経験を見つめ、人はどう生きるのか、神を信じるとはどういうことかを問いかけます。とりわけヨブ記は、誠実に生きている人が苦しむという現実を、長い対話を通して取り上げます。

主人公ヨブは、ウツの地に住み、神を畏れ、悪を避ける人として紹介されます。家族にも財産にも恵まれていましたが、相次ぐ災いで子どもたちと財産を失い、自分自身も病に苦しむことになります。物語の出発点に置かれているのは、神に忠実な人にも、理解しがたい苦難が訪れるという問題です。

全体は 42 章からなります。冒頭の 1～2 章と結びの 42 章 7～17 節は物語の形で書かれ、その間の大部分は詩による対話や語りで構成されています。3 章でヨブが生まれた日を呪うほどの嘆きを口にすると、友人たちとの議論が始まります。28 章には知恵を探し求める詩が置かれ、29～31 章ではヨブが自分の歩みを振り返って訴えます。32～37 章では若いエリフが語り、その後、38 章で主ご自身がヨブに答えられます。今日読むのは、この長いやり取りを経て語られる神の言葉です。

冒頭の天上の場面では、ヨブが神を畏れるのは、恵まれた暮らしを与えられているからなのか、という問いが出されます。読者はこの場面を知らされているわけですが、ヨブ自身は事情を知らされないまま苦しみを生きます。そこには、人生がうまくいくことと、神を信じることとの関係を問う意図が見られます。

訪ねてきた三人の友人は、最初の七日七夜、ヨブのそばに黙って座ります。彼らは、ヨブの苦しみを見たはずです。ところが、議論が始まると、正しい人は報われ、悪を行う人は罰を受け

るという考えから、「ヨブにも罪があるのではないか」と迫ります。苦しみの意味を説明しようと躍起になるうちに、目の前の友人ヨブを責めるようになってしまったのです。

ヨブは、その説明に納得できず、神に直接答えてほしいと求め続けます。結びでは、神が友人たちの語り方を責められ、ヨブの暮らしが回復する様子が描かれます。ただ、そこに至る長い嘆きも、この書物の大切な部分なのだと思います。ヨブ記を読む私たちも、結末を急ぐ気持ちをいったん置き、苦しむ人が何を訴えているのかを丁寧に聞くよう求められているのかもしれない。

問い 友人たちは、慰めようとして訪ねてきたのに、なぜヨブを責めるようになったのでしょうか。人の苦しみに接するとき、私たちにも似たことがあるのでしょうか。

3 神の問いに耳を傾ける ヨブ記 38 章 1～18 節

38 章で、主は嵐の中からヨブに語りかけます。ヨブが求めていたのは、自分の苦難についての説明でした。しかし主が語るのは、大地、海、夜明け、そして人の目が届かない深みについてです。この「かみ合わなさ」には戸惑いも覚えますが、神の言葉を聞きたいと思います。

1～3 節では、知識のないまま神の計画を論じるヨブに対し、厳しい問いかけがあります。人間の理解には限界があることを認めるよう求める言葉です。しかしまた同時に、神はヨブを、直接語りかける相手として扱っています。長く訴え続けてきたヨブが、今度は、神ご自身の言葉を聞く立場に置かれています。

4～7 節では、大地の創造が、建物の土台を据えるように描かれます。人間が生まれるよりも前から世界があり、その世界を造った方がおられます。8～11 節では、海が胎から生まれるものとして語られます。神は海に境を定め、雲を上着のようにまとわせます。海を支配する力と、生まれたものを包みこむような暖かさが、一つの場面に描かれています。

12～15 節の夜明けには、闇の中で力を振るう悪しき者が、その力を奪われるという描写が続きます。16～18 節では、海の深みや死の門が挙げられます。神の問いかけは、ヨブの考えを次々に超えていきます。これらは、世界の成り立ちと神の働きを、詩によって語る箇所です。描かれた情景を思い浮かべながら、創造する神と人間との関わりを考えたいと思います。

ここでは確かに、神の大きな、偉大さが語られています。しかしそれによって、「だから人の苦しみなどちっぽけなものだ」して良いのでしょうか。苦難の理由はなお謎として残っています。そしてヨブは、自分の問いを抱えたまま、神の語りかけを受け止めています。ここには、自分の経験を超えて広がる世界の中で、神との関わりを問い直し続けている姿があります。

なお、42 章 7 節で、神が友人たちを責めていることも、ここを読む手がかりになるかもしれません。神について綺麗に整理された説明をすることと、神の前に誠実に立つこととは、必ずしも同じではありません。納得できない思いを神に訴え続けるおとにも、信仰の真剣さが表れているのではないのでしょうか。

問い 自分をヨブの立場に身を置くならば、この神からの語りかけはどう聞こえるのでしょうか。

4 倉に収められない命 ルカ 12 章 13～21 節

ルカ福音書では、遺産を分けてもらえるよう兄弟に話してほしい、という依頼から話が始まります。主イエスは個別の争いの調停から、聴衆一同に向け、食欲の問題一般へと話を進めます。それは一言でいえば、この世の富だけで人生を確かなものにできるのか、という問いかけです。

たとえに登場する金持ちの畑は豊作でした。彼は倉を建て直して収穫を蓄え、長い将来にわたって楽しんで暮らそうと考えます。実りを喜び、先に備えるのは自然なことでしょう。ただ、彼の言葉は、初めから終わりまで自分自身ばかりに向けられています。恵みとして神から受けたという視点や、誰かと実りを分かち合おうという思いに広がっていく様子は見られません。

彼は、穀物を倉に収めれば、これから人生は何も心配ないと考えています。ところが、その夜に彼は命を失うことになります。彼は、たくさんの財産を蓄えながらも、その富も命も、すべて神の御手のうちにあることを忘れていました。

21 節は、自分のために富を積むことと、神のために豊かになることを対比します。神から受けているものに気づき、それを誰と、どのように用いるかが問われます。私たち個人としても教会としても、与えられている富（経済、経験の蓄積、知恵、視点など）をどう用いていくのかが問われているように思います。

問い 将来のために備えることと、蓄えだけを頼りにすることは、どこが違うのでしょうか。金持ちの計画に欠けていたものは何だったのでしょうか。

5 鳥と野の花に目を向ける ルカ 12 章 22～28 節

22 節から、主イエスは弟子たちに語りかけます。前半の金持ちは、余るほどの作物をどうするかと考えていました。今度は、食べ物や着るものを心配する人々が視野に入ります。持っている人にも、不足におびえる人にも、命を支えているのは誰かという問いかけがなされています。。

主イエスは、鳥や野の花を見るように促します。鳥は種を蒔かず、倉に収穫を蓄えることもありません。それでも神は鳥を養ってくださる。働いて糸を紡ぐことのない花も、神によって美しく装われています。主イエスはその姿を示しながら、弟子たち一人ひとりを、また私たち一人ひとりを、神がどれほど心にかけておられるかを語ります。

心配するなと言われても、不安を抱えたままの日々が続くことはあります。生活が苦しい人に、信仰があれば不安は消えるはずだと言えば、その人を重い気持ちにさせるだけかもしれません。28 節には信仰の乏しさを問う厳しさもあります。ただ、その言葉を受け止めるためにも、直前で繰り返される、神があなたがたを顧みてくださるという約束に聞きたいと思います。

働くことや、日々の暮らしを整えることには、それぞれ大切な意味があります。しかしまた、働く力が衰えていくときにも、人の手を借りて生活するようになって、私たちは変わらず神に大切にされています。鳥や花を見よという招きは、自分の働きや成果だけで自分を測ってしまう私たちに、別の視点を与える誘いです。

6 必要を知っておられる父 ルカ 12 章 29～31 節

30 節で主イエスは、父なる神が私たちに必要なものをご存じだと語られます。食べ物や着るものは、体をもって生きる私たちに欠かせないものです。その必要を知っておられる父を信頼し、神の国を求めるよう招かれています。

神の国とは、神のご支配が行き渡ることです。それを求めるとは、自分自身の生活だけを中心に考えるあり方から、神が大切にしておられる人々へ目を向けていくことでしょう。困っている人が必要を口にし、その声を聞いた人が、できることを共に考える。

そして助ける側、助けられる側は固定されません。私たちは状況や内容によって、どちらにも置かれることがあります。神に養われているという信頼は、そのような相互の関わりを通して培われます。

食事を届ける、困っていることを一緒に整理する、必要な支援につながる手伝いをする。助けを必要とするときには、自分からそれを伝える。私たちは、人の手を通して神の支えを受けています。福音書が「教会に向けて」書かれたことの意味が、そこにあります。教会とは、そのような分かち合い、共に神の養いを体現するよう召されている共同体です。

続く 32～34 節では、父が喜んで神の国を与えてくださるという約束と、財産を施すようにとの言葉が並んでいます。神の国は、まず神が与えてくださるものです。その恵みを受ける者として、私たちも与えられたものを分かち合います。31 節の約束は、この流れの中で受け止めたいと思います。「より豊かになること」に人生を費やすよりも、私たちの必要を深く知っておられる神を信頼し、互いの暮らしを支える方向へと招かれています。

問い 神が私たちの必要をご存じであるという言葉、教会の交わりの中でどう受け止められるでしょうか。助けを求めやすくする制度や雰囲気作りは何かあるでしょうか。

7 造られ、生かされて

ヨブは、失ったものの大きさを抱えたまま、創造された世界へ目を向けるよう促されました。主イエスは弟子たちに、鳥や花を養う神を示しました。境遇は異なっている、どちらの箇所でも、人は神との関わりの中で生きています。

苦しみについて問い続けるときも、明日の暮らしを心配するときも、その思いを神にぶつけることを私たちは許されています。自分にできる備えをしながら、自分の力を超えることは神に委ね、人の助けも受け取っていく。そうして受けているものに気づき、隣にいる人と分かち合う。「造られ、生かされて」という言葉を、日々の信仰生活で味わっていければ幸いです。